7　図画工作科

加藤潔己・阿比留時彦

1　研究テーマ「自立に向かう子どもたち」

本校が考える「自立した子どもの姿」とは，「発達段階に応じて，他との関わりの中で，自ら考え，判断し，行動できる子ども」である。ここで，子どもたちが身につける学力は，主体的思考力，課題解決能力，関わりの中で自分自身に自信を持ち，「自分らしさ」を探求していく力であると考える。これはまた，自己確立をめざすものであり，図画工作科のめざす創造的心情の育成と目的は合致すると考える。　豊かな思いを持ちながら，昨今，それをどのように表現するとよいのか，その方法を知らずに，或いは，その方法を試すような経験を十分に保証されずに成長する子どもたちが増えていると思われる。自分の思いを表現するのに多様な方法を試したり，じっくり考えたりすることや，また，それを遊びの中で培っていくなどの環境が，大人の価値観の暮らしのなかで，失われてきているのではないかと考えた。図画工作科として，このような子ども達の実態とまわりの環境を踏まえて次のように求める子ども像を構想した。

(1)　本校図画工作科としての自立に向かう子ども像

思い（夢や願い）の実現のために ── 自ら必要な方法を考え，判断し，表現する子ども

- 低学年 ── 楽しみながら……安心して体験を
- 中学年 ── 試行錯誤しながら……経験を積み重ねて
- 高学年 ── 見通しをもって……高めながら，総合的に

(2)　サブテーマ「自分で決める場を大切にして」について

「自分で決める」からこそ，決めたことに対して本気で集中し，没頭できるものである。また，「自分で決める」からこそ，責任を負うものである。決定の動機が内発的なものであること，切実感のあるもの，そして造形的表現欲求を満たすものであることが重要であり，そうでなければ，その決定や，それに続く活動は，「自立」を育むものにはなりえないと考える。 ただ「決める」のではなくて，「自分の思いの実現のために，自分で決める」という決定が求められると考える。

2　研究の方向性

(1)　決定主体と教師のはたらきかけ

学習の中で自分で決める場（環境）や対象として，次のような視点を考えた。

学習には，場の設定や指導などの，教師の働きかけが不可欠である。それぞれの視点での，指導者（教師）のはたらきかけと学習者（子ども）の決定の主体の度合いについて，題材ごとに設定している。

決定要素として考えたもの

テーマ，表現形式，材料，表現方法（技法），時間，空間，仲間

(2) 新たな図画工作科教育課程の創造

子ども達の「自立」を育む上では，できるだけ子ども達が自分たちで決めていく場を保証することを重視したい。つまり決定要素をできるだけ子ども達に委ねていくというものである。ただ，このような題材だけではなくて，下の表のようにねらいを焦点化した題材とのバランスを考えていくことが必要である。例えば，教師側の設定の割合が大きい題材で，子ども達が様々な造形経験をつんで行くことも不可欠なことである。

【表】　表現欲求，心の解放を主なねらいとする題材
【材】　材料経験，表現方法，表現様式の獲得を主なねらいとする題材
【相】　相互理解を主なねらいとする題材
【造】　造形的な見方・考え方の獲得を主なねらいとする題材
【知】　知識，技能，造形文化の獲得を主なねらいとする題材
【総】　学習したことを総合的に生かすことをねらいとした題材

(例)第３学年：「みる」…見ること中心に 「かく」…かくこと中心に 「つくる」…つくること中心に
【60時間】　　＊ ○の中の数字は時数を表す。

月	み　る		か　く	つ く る	
4 月		みる活動を常に意識して生かす	・にじみから思いを広げて④【材】		みる活動を常に意識して生かす
5 月			・トントントンのくぎうち遊び⑥【材】		
6 月	・絵の中の世界④【造】 ～パウル・クレー～			・きみはねん土のマジシャン パート Ⅰ ②【表】	
7 月			・夜の空・深い海④【材】		
9 月			・夏休みの思い出をもとに④【表】		
10 月	・絵の中の世界④【造】 ～６人のピカソ～			・きみはねん土のマジシャン パート Ⅱ ②【表】	
11 月			・お話さんぽ道④【相】	・色糸のげいじゅつ家④【材】	
12 月	・ぼく、わたしのすきな絵②【知】		・ぼくは島の王様⑥【材】		
1 月			・主役を決めて⑧【材】		
2 月			・はこの中は、ないしょ⑥【総】		
3 月					

(補)・うきうき，メイクアップ　②【表】　　・ゆめを運ぶ乗り物　⑥　【総】

この中で，「造形遊び」を方法として取り上げではなく，その基本的な考え方を基軸とし，「みる」「かく」「つくる」を方法の柱立てとする。このことは，「より子供の活動に沿った学習とは何か」を原点にしている。

成果と課題

成　果

研究テーマ「自立に向かう子どもたち」 の具現化を図るために，教科として「求めるこども像」を構想し，そのこども像にせまるための教材開発，カリキュラムづくりをすすめることができた。

カリキュラムづくりや教材開発を考えるときに，決定要素や中心となるねらいをもとに，これまでの題材をいくつかの分野に整理した。さらに，題材開発の中で，「学習したことを総合的にいかすことを主なねらいとする題材」を新しく構想することができた。

総合的な題材への取り組みを重ねていくうちに，子どもたちは，手取り足取り細かな指導をしなくても，自分たちの力で主体的に活動していこうとする姿勢が身についてきている。

低中学年では，いろいろな表現方法を，試行錯誤しながら，自分の思いに近づけるための工夫をする姿が多く見えるようになってきている。高学年では必要な材料や資料を自分で用意したり，製作するプロセスを意識して計画を立てて活動したりするなど，見通しを持って学習するようになってきた。

総合的な題材は，指導者側の「なげかけ，提案」と場の設定が重要であることが分かった。

また，総合的な題材が，より創造的に，広がりや深まりのあるものになるためには，それまでの学習が子どもたちのなかにしっかりと根づいたものあることが必要であることも分かってきた。

つまり，いろいろな造形体験の蓄積によって，総合的な題材での表現活動が生きてはたらいているということである。

課　題

これまで，自立に向かう子ども像の具現化をめざし，題材開発やカリキュラム構想に焦点を当てた研究をしてきた。

図画工作科として、「総合的な題材」を構想した背景には、自らが進んではたらきかけようとする意欲を出発点としている。それまでの先行題材での経験をふまえ、自らが材料・人との関わりを求め、取捨選択し、表現を決定する過程で思考力，判断力などの生きてはたらく力を高めることができると考えたからである。

子ども自らが自立に向かうためには、一人ひとりが生きる学習でなくてはならない。

今後の研究の方向として，子ども達一人ひとりの内面にある認知面，つまり，イメージ（めあて追求）の過程に焦点を当てる必要を感じている。 成果にも述べたが，たしかにこども達は自主的に見通しを持って活動するようになった。しかし，それは活動として外側にみられる側面の見取りであり，個々人の内面の，イメージがどのように変化し，イメージの表出，実現に向けて高まっているかについて見取っていくことが重要であると考える。

思考，表現，感じ方，理解のしかたなどの見取りについて，子ども達一人ひとに応じた方法について探っていくことを考えている。